

即ち以上の如く、各國いづれも資本主義に囚はれることなく、新しい經濟組織に生じやうとしてゐる。勿論それは不徹底なものもあるが、見當違ひのものもあるかも知れぬ。しかし資本主義は改造されなければならぬと、何處の人も眞面目なる人は考へるやうに思つたのである。

曾て資本主義粉砕は、無産階級の攻撃的スローガンであつた。しかし今日では無産階級だけではなく、あらゆる階級を通じて、眞に國家社會を思ふものは、コノ疾に觸れて來たのである。

勿論彼等の多くは資本主義改造とは言つてゐない。否資本主義の延命策だとする言つてゐる。それにと拘らず、事實は資本主義の根本的改造に向つてゐるのが現在の世界状態である。

#### 四、日本の反資本主義的愛國運動

昭和六年九月十八日、滿洲事変を轉機として、日本は國家主義的色彩を濃厚にした。それには種々の原因があるが、次の二つの要因はその最も大なるものである。

(一) 年々九十萬人の人口増加があるにも拘らず海外進出の道は狭され、日清、日露の兩戰役によつて得たる既得權益滿洲も、極めて危険な状態に陥つてゐる。支那には既に大規模の日貨排斥が行はれてゐる。日本はその生存のために、滿洲は正にその生命線である。滿洲は断じて守るべきであるといふのがその一つ。

(二) 打續く日本の經濟不況は少しも打關されてゐない。政府は資本主義的克服策（デフレーション政策、インフレーション政策）を採つてゐるが、何等の利目もない。反資本主義的勢力たる共産黨は日本では特に小兒病的で、國內に反資本主義的勢力が濃厚でも、共産黨はその勢力を失墜して行く。合法無産運動も統一戦線が樹立せず、蝸牛角上の争ひをして未だ力とは廿らぬ。それらのために國民は一種の絶望的氣分に閉されてゐた。そこへ滿洲事変が起つた。軍部が反資本主義的行動が傳へられた。非資本主義的皇道主義に基く國家建設がその目的であると傳へられた。そこに多少の批判の餘地があつたにせよ、絶望的な國民は軍部の活動に期待した理窟抜きに滿洲事変を容認し、愛國運動を支持したのがその二である。